



スキポール空港の“スラムットソレ”

土 屋 健 治*

オランダ・スキポール空港では、パスポートも見ずに次々と乗客を入国させていた。カスタムもそのまま通り過ぎる。若い係官がうしろから“スラムットソレ”（こんばんわ）とインドネシア語で声を掛けたので、ふり返って会釈を返すとニコリとした（1992年6月23日）。

翌日、先発隊に合流してハーグへ出かけた。文部省科学研究費を得て、「海域世界の地域間比較」をテーマに北欧・東欧の交易都市を一巡する、その調査旅行の始まりである。

オランダでは街の風景の中にインドネシアが溶けこんでいた。

ハーグ郊外の大きな広場では、折りしも大天幕が張られサーカスやロックバンドや移動遊園などのイベントが始まろうとしていた。このオランダ風縁日は、“パッサルマラム”（夜市）と大看板を掲げて客寄せをしていた。

別の日アムステルダムのあちこちに、“ジャワ少年”という商標の刻みタバコの広告が貼られているのを目にした（写真参照）。この広告は昨年もアムステルダムで目にした。この年にはまた国立博物館の特別展示室で「ダエンデルス（1762～1818）展」



が開催されていた。彼は親ナポレオンの軍人で、1808年から1811年まで東インド総督の任にあり、ジャワ島の東西を結ぶ「郵便道路」を造り上げた。ジャワの詳細な地図や歴史図解を、家族連れの人々が熱心に見学していた。

何げないことだが道路名もしばしば植民地に由来している。昔住んでいたライデン市の一角には、スマトラ、ジャワ、バリ、ロンボク、スンバ、アチェ等と名付けた道路が集まっている。これについて、植民地主義が清算されていないことを示すのだから止めるべきだ、という話もたえて聞かない。

インドネシア風レストラン、サテヤナシ・ゴレンのような料理もヨーロッパの中でオランダだけのものだ。店構えなど1920年代のバタビアを思わせ、今しもランプが灯りホトホトと舗道をたたいて馬車が止まる趣がある。

オランダを他のヨーロッパ諸国からくっきりとわけているこの心性、つまりインドネシアに対する一途なノスタルジアは何に由来するのだろうか。

ひとつには、小国の身ながらアジアに大植民地を築き350年にわたって「守り育て」てきたと思いなすことによる世々代々のきずなの感情、“Primordial Attachment（生得の結び付き）”ともいべき心性があるだろう。

だがもう一つある。それは、オランダがインドネシアを通してアジア世界の全てを眺めてきたこと、だからインドネシアがアジア的普遍性の窓口をなしてきたことによるだろう。

空港の若い係官は“スラムットソレ”が、アジアの共通言語だと考えていたのかも知れない。

（京都大学東南アジア研究センター教授）

* Kenji Tsuchiya, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

「暴虐の5月」事件とチャムローン・シームアンのハNST宣言

玉田芳史*

1992年のタイは政治の熱い年であった。いろいろな事件の筆頭にくるのは、タイ語で「暴虐の5月」と呼ばれる5月の流血事件であろう。

3月22日に総選挙が行われ、首相選出をめぐる一波乱の後4月7日に国軍最高司令官兼陸軍総司令官スチンダー・クラープラユーン大將が首相に横滑りした。かねてから、軍首脳が91年2月23日のクーデタ以後いろいろな策をめぐらして権力の温存をはかろうとしているとの批判の声が強く、スチンダーはそれをかわすために首相に就任しないと明言していた。しかし、彼は「民族のため」と主張して、この約束をあっさり破った。野党や市民グループは彼の即時退陣を強く求めた。しかし首相はまったく動じず、運動も盛り上がりにかけていた。

それが一変したのは、5月4日に野党パラタム党党首チャムローン・シームアンが首相即時辞任を求めて決起したときであった。これを契機として多数の人々が反政府集会に集まり、ついに軍は5月17日夜から19日にかけて非武装の市民に発砲を繰り返して多数の死傷者を出す惨事となった。

反政府集会への参加者が増えた一因は、政府が反政府集会について事実の報道を許さず、情報の歪曲や誹謗中傷を繰り返したことにある。これに激怒した人々や、事実を自分の目で確かめたいという人々が次々と集会場所へ集まるようになった。つまり、政府側は火に油を注ぐようなまづい対応をしたのである。

しかしながら、主役はチャムローンである。バンコクに支持者の多い彼であっても、ただ集会への参加を呼びかけただけでは十分な人数が集まるとは限らない。政府側を震撼させるほどの数の人間を集めないと、運動に成功の見込みはない。そこで、ハNSTに訴えた。しかも、点滴などを受

け付けるタイの従来ハNSTとは違って、それらをいっさい拒否した。生命をかけてスチンダーと戦うと宣言したのである。多くのものは、肉食主義者で1日1食の彼の身体が長期間のハNSTには耐えられないのではないかと不安を覚えた。

この「激しさ」は後の9月の総選挙では裏目に出て議席の伸び悩みをもたらすことになるものの、5月には多くの人々を集める決定的な要因となった。ここでは、彼がハNSTに突入する際に発表した遺書の体裁をとった宣言文を翻訳して紹介したい。

チャムローン・シームアン少將の最後の手紙
生命をかけます。抗議運動が成功しなければ、
7日以内に死にます。

国家民族を思う国民の同胞の皆さんへ

数多くの国民が代議士以外の人物が首相に就任することにこれまで一緒になって反対してきており、「民族のために約束を破った」などという道義の面において計り知れないほどの害悪をもたらす[スチンダーの]発言に反発していることははっきりとしています。私たちは原則論で反対しているのです。スチンダー大將を個人的に嫌っているものはおりません。私たちは仕事ぶりに反対しているのでもありません。ですから、政府側が的外れにも主張するように、取りあえずまず仕事ぶりを見てから、ということにはならないのです。

革命評議会 [=91年クーデタを行った軍首脳]は権力を温存し、この権力を今後さらに10年間にわたって継承する計画を立てていますが、それが国家民族に多大な損失を及ぼすであろうことに、国民ははっきりと気付いています。このままでは日増しに独裁体制へと向い、私たちが護持し敬愛する民族、宗教、国王に影響を及ぼすのは必至です。おまけに、経済には数百億バツ以上の損失をもたらすでしょう。

* Yoshifumi Tamada, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

スチンダー大将とその一味は一時的な過ちを犯しました。私たちは彼らに愛情と思いやりに満ちた最善の打開策を提示しました。スチンダー大将に、首相を辞任してどの選挙区でもいいから代議士に立候補しなさい、その選挙区の代議士は喜んで辞職して補欠選挙への道を開きましょう、でもこれ以外の方法での言い逃れはいっさい認められません、と要求したのです。

目下の政治の過ちを正すのは本当は政治家の務め、代議士の務めです。でも、代議士は国会で反対の発言ができません。国会議長と副議長は政府側の人物ですし、政府側の代議士は195名[総数360]おり、おまけに270名の上院議員も政府を支持しているからです。国会での発言は、これは民主政治ですよと見せかけるための芝居に過ぎません。ですからたくさんの方の代議士が国会の外で国民の皆さんと一緒に平和な方法で反対をしなければならぬのです。

抗議集会は、政府の施政方針演説が行われる5月6日だけしか効果がないかも知れません。6日を過ぎると、反対してももはや効果はほとんどありません。国民や各種のマスメディアは口を封じられてしまうでしょう。独裁的な色合いが濃くなり、民族の重要な問題を解決できなくなります。お気付きのように、今回の反対運動は幅広く急速に拡大しています。いろんな教育機関の先生方が一緒になって今回ほど強く抵抗したことはこれまでにありません。これは誰もが私たちの国家民族に生じようとしている大きな危険を感じとっているからです。

反対の効果が本当にあがるように、私たちは、国のことに不安を感じておられる皆さんに1日仕事を休んで5月6日午前8時に平和な集会に参加していただけるようお願いいたします。一緒になって、スチンダー大将に首相を辞任するように申し入れるためです。スチンダー大将が姿を現す国会前にお会いしましょう。

これまでのチャラート空軍少尉とその仲間の断食による闘争[チャラートは退役将校で代議士経験のある政治家、4月8日からハンストを続けていた]は長期的な効果を持つものであり、正しい方法でした。それというもの、国民の中には、問題を理解するのに長い時間を必要としている人た

ちがまだたくさんいるからです。でも、これから闘争に加わる皆さんは2-3日間という短期間に効果が出るような総合的で絶対的な方法を使わなければなりません。

私はこれまで政党の党員として強く反対してきました。でも、効果がありませんでした。今回は政党とは無関係に、個人として、一国民として反対したいと思います。

私はこれまで時間をかけてじっくりと考え、周到に思案してきました。私は生命と引換にしたいと思います。今日から食事を取りません。何もいっさい受け付けません。グルコース、塩水、医者の診察、治療行為その他一切を拒否します。この方法で断食をすると、およそ7日ほどしか生きられないでしょう。私はスチンダー大将が辞任するまで、もしくは餓死するまで断食を続けます。

私が反対するのは権力を望んでいるからではありません。もし今回の反対の結果、大臣、副首相あるいは首相になれるチャンスが私にめぐってきたとしても、私はいかなる官職にもいっさいつきません。私は絶対に約束を破りません。

国民の同胞の皆さん、5月6日の集会は「水が少なくて火が消せない [=参加者が少ない]」というようなことになるかも知れません。ですから私はこの場を借りて皆さんに、とりわけバンコクか地方かを問わずこれまで私を支援してくださった皆さんに、お別れの挨拶を述べさせていただきたいと思います。

私はタイ人に生まれたこと、宗教と巡り合ったこと、国王王妃両陛下のご庇護を受けたこと、数多くのすばらしい国民同胞の皆さんと知り合いになれたことを誇りに思っています。数日のうちにこの世をさることになっても、思い残すことはありません。

多くの方々がこれまで私に向けてくださった思いやりについて、皆さんに、そしてありとあらゆる事柄に厚く御礼申し上げます。

さようなら

チャムローン・シームアン少将

1992年5月4日

(1992年9月27日記

京都大学東南アジア研究センター助教授)